
Poison and medicine

風吹流霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o i s o n a n d m e d i c i n e

【Nコード】

N 2 2 9 3 P

【作者名】

風吹流霞

【あらすじ】

平凡な村の奥に母と2人でひっそりと暮らしていた少女カリン。しかし、15歳になった時、村を襲う悲劇で母と居場所を失う。カリンは生計を立てるためにギルドを訪ねるが、彼女が望む職業に就くには職業証が必要だと教わる。その職業証を手に入れるために、彼女は学園に入学することになるのだが・・・。

prolog 小さな村の悲劇（前書き）

学園ものを書きなくなったので、またもや見切り発車。

prolog 小さな村の悲劇

ある日、ノルマルド王国の王都マグノリアで、恐ろしい伝染病が流行った。

王都は死の恐怖に包まれ、悲鳴、うめき声、哀切の音が響き渡った。この伝染病により、王都の3分の1が死に絶えたとも言われている。しかし、ある勇気のある医師によって、ワクチンが開発され、伝染病はようやく終結した。

その医師は心血を注いだワクチンを開発したのを見届け、その伝染病によってこの世を去った。

彼の功績をたたえた国王は、マグノリア王立学校に薬学科を設立した。

母、ミューゼルナはナリテ村の唯一の医者だった。

茶色い髪に緑色の瞳をした美しい人だった。過去形なのは、母が故人であるからだ。

ナリテ村近くの森に住み、自ら治療に使う薬草を育て、訪れた病人を分け隔てなく治し、治療代は生活に必要な野菜や小麦などで受け取っていた。

母は自分が言うのも何だが、とても優秀な医者だった。

そんな母の背中を見て育った私は、知らず知らずのうちに母の真似事を始めていた。

それを見た母も、自分に出来る限りの知識を与えてくれた。でも、

私は気付かなかったんだ・・・

村に恐ろしい病魔が迫っていたことに――

一週間ぶりに森を出たら、村が滅んでいたなんて誰が信じるだろうか……。

それは私が実際に体験した事。母は村に病人が出たからと言って出て以降、家に戻らなかった。

否、戻れなかったのだ。

遺体が散乱するナリテ村で、母の遺体は見つかった。

遺体には大きな傷も見つからなかったので、戦争や略奪といった類で全滅したわけではない。

では、原因は何だろうか……。

そこで、私は生前の母が言った言葉を思い出す。それは村の患者の事だったのだが、

もしかして、あの伝染病……？

母が言っていた患者の症状は、風邪に近い症状だったが、今思えば、あの伝染病の症状と合致する。

王都で流行した伝染病の恐怖は、記憶に新しい。同時に母はこうも言っていた。

王都で流行った伝染病が地方に飛び火し、多くの村が滅んでいるともしやと思うが、あの伝染病がこのナリテ村を滅ぼしたのであるのか……。

母の手伝いをすべく、立ち上がった私を、母は1人でも十分だからとやんわりと私の手伝いを断った。

あの時、母は村を襲ったのが例の伝染病だと理解していたのかもしれない。

王都ではワクチンも特效薬もあるが、王都より離れたこの村ではどちらも手に入らない。

ワクチンや特效薬が置いてある大きな街は、どんなに急いでも一週間にかかる。

伝染病が発生したのであれば、近くの街に報告の義務がある。恐らく、誰かは街へ報告へ行かせたのであろうが、間に合わず、村人全員が死んでしまったのだろう。

母から聞いた話では、例の伝染病は発症後、一週間以内にワクチンか特效薬を処方しなければ死に至るという。

一通り村を見回ってみたが、生存者は確認できなかった。

子供達の遺体が少ないのは、親達がすぐさま避難させたためだろう。恐らく、母の進言によるものと私は考えた。

生存者が確認できないとなれば、私がこの後、とる方法は決まっていた。

これ以上、感染を拡大させない・・・

その方法は村を焼き払う事。感染者が触れた物全てを焼き払えば確実に感染拡大を防止できる。

残酷だがそれが最良の方法だった。幸い、狭い村であつたから、村人達の顔と名前は一致していた。

ここは誰が住んでいて、誰が居たのかを頭の中に叩き込む。

数百種にもなる薬草を頭に叩き込んでいた私にとってはそれはたやすかった。

村に放った火は、緋き炎となり、一昼夜かけて嘗め尽くす。

炎が村を焼き尽くす間に、私は村人達を埋める墓地を作った。

一面、焼け野原と化した村の民家を一軒ずつ歩き廻り、遺骨を集め、1人ずつ、事前に作っておいた墓地に埋葬した。

急ごしらえの木の墓標を立て、誰が埋まっているか解るようにもした。

避難していた生存者達が帰ってきた際、親の遺体を確認できるため

だ。

母の遺体だけではどうしても共同墓地に埋葬できず、森の家近くに埋葬した。

消毒のつもりで、村中に石灰を撒く。ここまでしてから、私は家の本を処分した。

生前、母に頼まれていたからだ。私で保管できればいいが、伝染病で村人が死に絶えたこの村には、役人が出入りするだろう。

その人達が、母の書斎を覗く可能性がないとはいい切れなかった。妙な詮索をされても困るから、私はこの村を捨てることにした。

最低限の荷物と薬草の図鑑と薬草のサンプルをまとめ、村を後にする。

ノール地方にあった村の半分以上がこの伝染病で崩壊した。

この悲劇は、後に「ノールの悲劇」と呼ばれることになる。

生存者は親に促され、村を出ていた子供達と街に報告に向かった若者達だけであった。

皮肉なことにこれ以降、火葬が定着し、感染病拡大防止に一役買った。

ナリテ村の処理は高く評価されたが、誰が行ったのか、この時はまだ判明しなかった。

prolog 小さな村の悲劇（後書き）

プロローグはカリンの独白なので、一人称で「私」。
次話から三人称になりますので、ご注意を。

1・ギルド

マグノリア王立学校は貴族の子息、息女、果ては王族が通う名門校だ。

騎士科、魔法科、薬学科が存在している。

他校に普通科はあるため、こちらは専門学校に近い。

このマグノリア王立学校には他校とは違う面白い制度があった。ギルド奨学金制度である。

王都にある大陸一のギルドと手を組み、ギルドは人材発掘と入学金を支払う代わりに、学校は優秀な生徒をギルドに派遣する。

卒業後、生徒はギルドの実戦が物をいい、その道での就職に有利であると共に、そのままギルドに就職も可能だ。

学園としては優秀な生徒を輩出したという名誉、ギルド側としてはギルド員確保という双方にとってメリットがあるし、生徒としてはギルドでの小遣い稼ぎができる。

マグノリア王立学校騎士科2年フェルナンド・クローズもギルドに登録している一人だ。

同じくギルドに登録している二つ年上の兄と一緒に依頼をこなすことが多い。

兄ヴィクターは魔法科4年に属している。

一応、貴族出身の彼ら兄弟だが、長兄が跡を継ぐため、二人は手に職をつけるためこの学校に入学を決めたのだった。

その日も彼はギルドに顔を見せた。ギルドの受付には女性が座っていた。

彼女はリズ、このギルドの受付を一手に引き受けている。

外見、楚々とした印象を受ける彼女だが、中身は剛毅の者だ。

強面の冒険者達とは真っ向から対峙し一歩も譲らず、気難しそうな

冒険者達にはなだめすかし、又はおだてたりして手綱をとる。

皆、彼女には頭が上がないのだ。簡単に挨拶を済ませ、依頼を探してもらった。

彼女が取り出した数枚の依頼書を見て、フェルナンドは端正な顔をしかめた。

「そんな顔しないの、せっかくの格好いい顔が台無しよ」

リズに注意されても、彼はその表情をやめようとしなかったのは、その依頼が全て彼が苦手とする部類だったからだ。

「残念ね、今はこういう依頼しかないのよ」

「薬草ぐらい、自分で取りにいけばいいのにさ」

彼はけつと吐き捨てた。依頼の内容は薬草採取である。

「一口に薬草といっても、栽培が難しくて特定の場所にしか生えない奴もあるしねえ」

そういうのに限って、薬効が高かったりするのよねえと彼女は頼杖を付いた。

逆に言えば、それをギルドが発見できれば高値で売買が出来るため、よい稼ぎとなる。

「しかも、これ、全部、リユンネじゃないか」

依頼書を手に取り、フェルナンドはため息をひとつついた。

リユンネは薬草のひとつで、栽培が難しく自生している物を採取するしかないが、場所が限定されてしまうのがたまにキズという代物だった。

「リユンネは需要と供給が追いついてないのよね」

困ったわとリズは頼杖を付いた。

カウンターで依頼書に眼を通していると、隣に気配を感じ、フェルナンドはちらりと隣を伺う。

黒いマントとフードをかぶった年齢不詳、性別不詳な人物が立っていた。

あ、怪しい・・・

思わず腰の剣に視線が移った。

「あの、すみません」

怪しい黒フードの中から洩れた声は鈴の鳴るような美しい女性の声だった。

その声に媚さ、策略めいた思考は微塵も感じられず、ひとまず彼は視線を戻す。

ギルドに登録している魔法士あたりも、このくらい怪しいということと思い出した。

確かに見かけない顔ではあったが・・・。

「ギルドに登録したいのですが・・・」

あらと嬉しそうにリズが振り返る。

「希望は何かしら？」

「薬師です」

きつぱりと黒尽くめの女に、リズは眼を輝かせた。

薬師はここマグノリアでも全体的に数が不足しており、それに比例してギルドでも不足気味だ。

薬師志望の彼女は是が是非でも手に入れない逸材だろう。

「資格はお持ちかしら？」

受付の女性に訪ねられ、「え？」とカリンは戸惑った。

「薬師に資格がいるのですか？」

「勿論、国に認められないと正式には雇えないわよ」

さも当然とばかりに応えた女性は、はっと何かに気付いたようだった。

「もしかして、資格もっていないの!？」

「・・・村では資格なんていらなかったし・・・」

カリンは慌てて視線をそらした。

「村と都会では事情が違うわよ」

「そうですか・・・」と彼女は頂垂れる。

受付の女性は資格がないと雇えないらしいから、ギルドに組することは難しいかもしれない。

村が伝染病で崩壊してから、彼女は仕事を探すべく王都へ辿りついた。

近くの街では自分を知っている人物が少なからずいる。

村が崩壊した事を知った彼らに色々詮索され、いちいち説明するのも面倒だ。

王都ではギルドがあつて、登録すれば仕事を斡旋してくれるという話を聞いて訪れてみた結果がこれだった。

「資格はどこで取れるのですか？」

「マグノリア王立学校の薬学科を卒業すれば取れるよ」

受付の女性に代わって、青年の声が応えてくれた。

声のした方向を向けば、隣に自分より少し上ぐらいの青年がカウンターに背を預けている。

金髪碧眼、端正な顔立ち、身なりが良かったため、王都に住む貴族の子息だろう。

「学校・・・」

カリンはがっくりと肩を落とした。学校に通学できるほどお金は持ち合わせていない。

貧乏な村である。街にある学校に通うことが出来るのは一握りの子供たちだけだった。

医者であった母が一通り、村の子供達には教えていたため、読み書き計算あたりは出来る。

娘であったカリンはそれ以上のことを教わっていたが……。

やはり、薬師として働くには無理があつたのかもしれない。

「……解りました。他の仕事を探してみます」

他の仕事で学校に行く資金を貯めてから資格を取ろう。何年かかるか解らないが……。

「お邪魔しました」と彼女は頭をさげ、ギルドを後にしようとしたが、

「あ、そうでした……」

黒尽くめの女、声質からして自分と同年代だろう。

彼女は手提げ袋から何かを取り出し、カウンターに置いた。それを見て、リズが眼の色を変えた。

「こ、これは……!!リユンネ……!!」

その声に思わず覗き込んだフェルナンドも、それが本物のリユンネであることを確認した。

学校の薬学科の標本に実物が納められていることを目撃していたからだ。

「貴方、これ、どこで……!!?」

リズの声が興奮で上擦っている。

「それは以前、私が採取して乾燥させたものですが、薬師としての資格を取るまでは必要ないですし・・・」

彼女は何を興奮しているのかわからないように首を捻っている。

「これ、とても貴重な薬草よ・・・!？」

「えっ・・・、そうなんですか・・・？」

案の定、見るからに驚いていた。

「私の居たところではそんなに珍しいものではありませんでしたよ。多少、採取場所が面倒なので手間がかかりますが・・・」

彼女いわく、この薬草はじめつとした洞窟の低温部分にしか生えないそうだ。

「ただし、一度に大量に生えますから見つけてしまえば、採取は楽です」

ふむふむとリズは熱心に彼女の言葉に耳を傾けていた。

彼女はもう一度頭を下げると、ギルドを後にする。

それを止めるはずのリズは、思いもかけず手に入った情報を元に、ギルド員たちに指示を飛ばしていて、彼女には眼もくれなかった。フェルナンドは迷った挙句、彼女の後姿を追うことにした。

1 ギルド（後書き）

この物語でのギルドっていうのは職業安定所みたいなものです。冒険者もいれば、職人さんもギルドに入っています。

中世における職人ギルドあたりを思い浮かべていただけると解りやすいかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2293p/>

Poison and medicine

2010年12月11日01時14分発行